



くろねこと
虹色のタネ





今日は雪。昨日も雪。
明日もきっと雪。
このあたりは雪が深い。
ボクの家以外 何も無い。



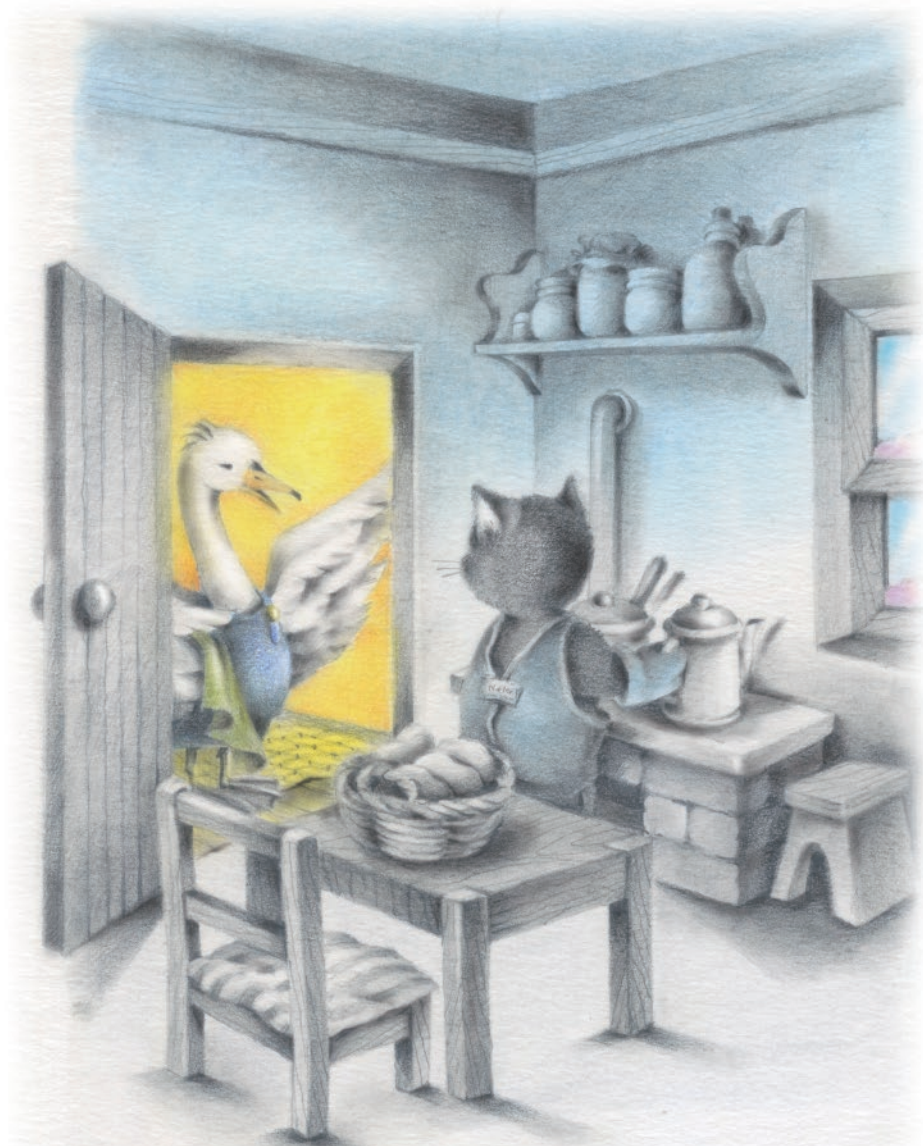
外は吹雪。風の音しかしない。
窓ガラスに映るボクは 透き通るブルーの瞳の まっくろなネコ。
手にしたホットミルクが 冷え切ったボクの心の氷をとかしてくれる。
ぼんやり外を見ていたら 玄関の方からコツコツ 扉をたたく音がした。



奥の部屋から出て 扉に向かう。
廊下の冷たさが足にしみる。



扉を開けると 鳥が一羽立っていた。
たぶん白鳥だと思う。雪みたくに白い。
白鳥は寒そうにクチバシを鳴らしながら震えている。
仕方がないので 家に入れてやることにした。



「いやー、助かったよ。ありがとう。
オイラはクウ。この吹雪で仲間とはぐれちゃってさ」
ホットミルクを入れてあげると クウはペラペラ自分のことを話し始めた。
仲間と空を渡って見たいろんな国の話、旅で出会った鳥たちの話。
海の話、空の話、花の話、歌の話。ボクの知らない 外の世界。



「そうだ、お礼にこれやるよ。
願い事がかなうんだってよ」
そう言うクウは羽をさぐって
緑色の小さな袋を取り出した。

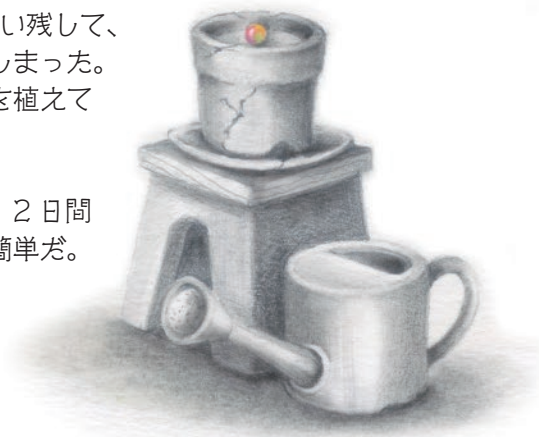


中には 少し大きいビーズのような
虹色をしたタネがひと粒と、
ボロボロの説明書が1枚。
「2日間 ひとつも声を出さなくて
世話をします。
水をやるだけでかまいません。
世話をしながら心の中で 願い事を
と覚えてください。2日目の夜中
12時に花が咲きます」





「帰りしなにまた寄るから」と言い残して、クウは冷たい空に飛んで行ってしまった。仕方がないので 植木鉢にタネを植えて水をやった。さっそく小さな芽が出てきた。いつだってひとりぼっちだもの。2日間ひとこともしゃべらないなんて簡単だ。それより願い事、どうしようか。



願い事を考えている間に 眠ってしまったようだ。目が覚めた頃には 時計は夕方の4時を指している。まあおかげで願い事を思いついた。ともだちが欲しい。
ボクの何も感じなくなってしまうた心、ひとりぼっちを凍ってしまったボクの心を溶かして、なくしてしまった時間を一緒に探してくれませんか。
ともだちが欲しい。



けれどひとまずお腹がへったし、
晩ごはんにしよう。
今夜は根菜スープと黒糖パン。
それとボクの大好きなホットミルク。
スープも温まるけれど、
やっぱりからだがじんわり広がる
ホットミルクがなくちゃ。

ヒゲについたミルクをなめながら
植木鉢に目をむけると、さっきより
ひとまわり大きくなっている。

なにをやることもなくなったボクは
植木鉢に水をやって寝ることにした。



2日目。
植木鉢をのぞきこむと、もうつぼみをつけて 重たそうにうつむいている。
もうすぐだ。
気になって仕方がないから、1日中 つぼみをながめて過ごした。
不思議な草は そんなボクに癒えるようにグングン伸びる。
カチカチと音を立てながら 時間がおもしろいくらい早く進む。
9時、10時、11時…



見まもる間に 少しずつ少しずつ 花びらがピンクに染まっていく。
ゆっくりと ほどけるように開いていく花びらのようすを見逃すまいと、
ボクは息をするのも忘れて見つめていた。
ついに長針と短針が重なった。



最後の花びらが開いたその時、目の前をまっしろな光が塗りつぶした。
まぶしくて 思わず手で顔をおおった。
白い光がおさまって そっと手をずらすと…

ポカンとしているボクに　ウサギは
「ぼうっとしないで。早くしないと時間がなくなっちゃうよ」と言って
ボクの手を引いて外に飛び出した。
2日ぶりの外の空気は冷たくて、からだが驚いたせいで　しっぽがふくらむ。
ウサギはボクを引きづるように　グングン歩いていく。



大きな穴のある木が見えてきた。



植木鉢があった場所に
まっしろなウサギが立っていた。

「ここにしよう」と言って木の中に入り、ボクをすわらせたウサギは
今までに見てきたことや聞いたこと ここではない広い世界について、
それはそれはいろいろな話をし始めた。
ボクは見たことも 聞いたこともないようなウサギの話に夢中になった。



突然ウサギは
「たのしい」と言ってボクを指さした。
意味がわからなくて首をかしげたボクに、ウサギは「今、キミは声を出して
笑ったよ」と言った。ああ、そうだ。ボクはなくしてしまった心を 一緒に
取り戻してくれるともだちが欲しいと願ったんだ。

「キミとぼくは もうともだちだよね」
ウサギにそう言われてうっとりして「うん！」とうなずいた。
「ほら、[うれしい] だよ。ほら、もうふたつも見つけたね」
次はどんなきもちを取り戻すのか ワクワクした。



次はどんなきもちを
取り戻すのか
ワクワクした。



一緒にかけまわるうちに
[おこる] や [おどろく]
[こわい] や [くやしい] も
取りもどした。
抜け殻みたいだった自分の中がどんどん満たされていくのがわかる。
空が明るくなる頃には、ボクはほとんどの感情を取りもどすことができた。





「上を見てごらん」と言って ウサギは赤く染まりかけた空を指さした。
「きれい…」 ボクは〔感動〕を取りもどした。
ふとうサギが「ねぇ、キミの名前は？」と聞いてきた。
誰かに名前を教えるなんて どれくらいぶりだろう。

「ヨク。翼って書くんだ」

「ぼくはセイ。星だよ。今夜は楽しかったよ ヨク。次が最後だ」
そう言って少し笑うと セイはボクの前から消えた。





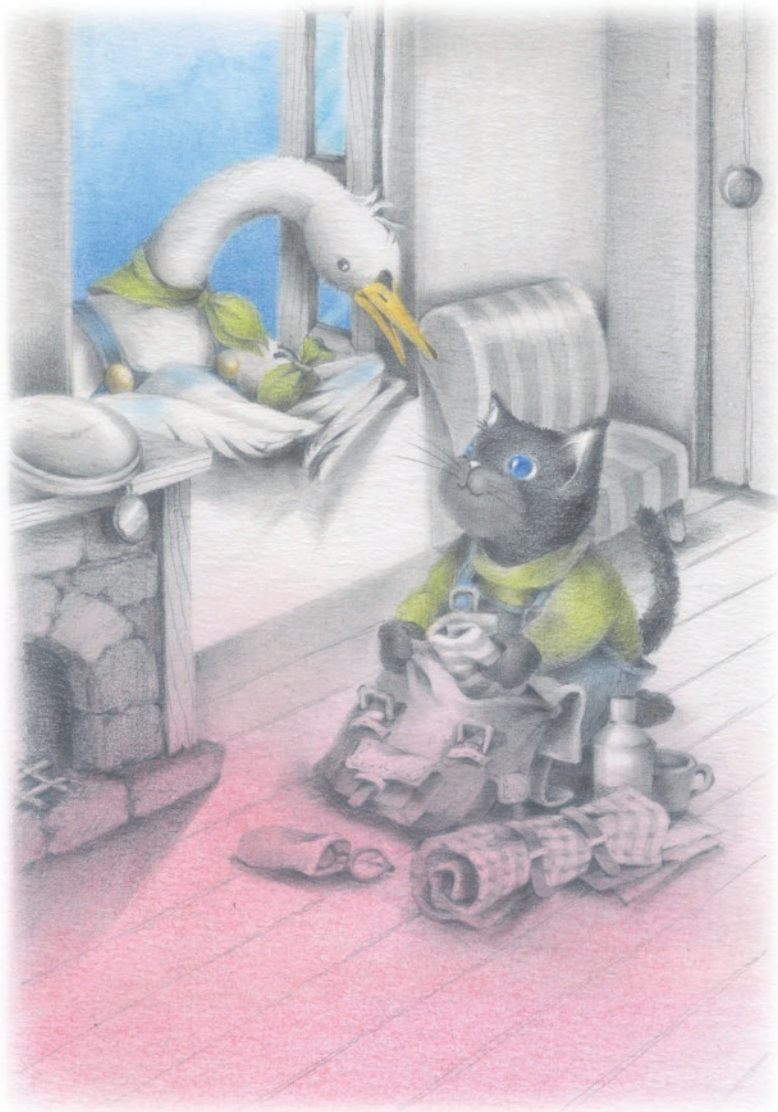
森じゅうを探しまわった。
先に家に帰ったのかもしれない。
息をきらして帰ってみても セイはいなかった。
植木鉢の中で あの不思議な花がパリパリに渴いて枯れていた。
植木鉢を抱きしめると 次から次に流れる涙でヒゲがぬれる。
セイが最後に教えてくれたのは [かなしい] だった。

泣いて 泣いて 泣きつかれた頃、
枯れた草のそばに落ちている虹色のタネを見つけた。
拾い集めている間にまた泣いた。
もうボクはこのタネを育てることはない。
[かなしい] なんて2度と知らない。
でも、このタネ、よく見ると…。



涙にぬれた
小さなタネに
うっすらと
地図がうかびあがった。





それから数日後
約束どおり クウがやってきた。
クウはボクを見て
「なんだい、おまえもどっかに渡るのか？」と聞いた。
「ともだちを探す旅に出るんだよ。
このタネのおかげで出会えた、まっしろなウサギをね」



クウはにっこり笑って
「そっか」。それじゃあオイラも途中まで一緒に行くよ」と羽ばたいた。
地図とリュックと「勇気」と「希望」を持って、
ねえ、セイ。こんどはボクがきみをみつけるよ。